



目録  
智

15  
1456  
4



門 5  
號 1456  
卷 4

今註之冊

二上藏書

早稻田大學圖書館  
藏 31.9.27 受  
藏 ▲ 書

其少遊歷中冬目錄

國華

上小野三上



- 一 方經吳陸辰所寫之事
- 二 中川島三海潛龍拾遺事
- 三 哲田三居法家系事 兼娘詠寄事
- 四 許田源三在石枕事
- 五 浮島地法公在事 兼事
- 六 岩井法平在事
- 七 石田在事
- 八 陽山在事
- 九 泰田在事

一 光樹寺如祖事 八  
 一 吉田園の寺事 九  
 一 小倉江野の寺事 九  
 一 石川右衛門の寺事 十  
 一 山内地蔵の寺事 十一  
 一 菅原の寺事 十一  
 一 山内左衛門の寺事 十二  
 一 小川左衛門の寺事 十三  
 一 杉村の寺事 十四  
 一 馬場の寺事 十六  
 一 村上の寺事 十七

一 石川右衛門の寺事 三十一  
 一 石川左衛門の寺事 三十二  
 一 石川右衛門の寺事 三十三  
 一 石川左衛門の寺事 三十四  
 一 石川右衛門の寺事 三十五  
 一 石川左衛門の寺事 三十六  
 一 石川右衛門の寺事 三十七  
 一 石川左衛門の寺事 三十八  
 一 石川右衛門の寺事 三十九  
 一 石川左衛門の寺事 四十  
 一 石川右衛門の寺事 四十一  
 一 石川左衛門の寺事 四十二  
 一 石川右衛門の寺事 四十三  
 一 石川左衛門の寺事 四十四  
 一 石川右衛門の寺事 四十五  
 一 石川左衛門の寺事 四十六  
 一 石川右衛門の寺事 四十七  
 一 石川左衛門の寺事 四十八  
 一 石川右衛門の寺事 四十九  
 一 石川左衛門の寺事 五十

三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六

見夢遊...  
 大慶院...  
 名...  
 古...  
 了...  
 按...  
 一...  
 文...  
 杉...  
 八...  
 比...

改房

見夢遊...  
 大慶院...  
 名...  
 古...  
 了...  
 按...  
 一...  
 文...  
 杉...  
 八...  
 比...

一本 洪壽





小言初少くはれそ母と元一房の初の通ひの由  
りか定まらば龍よとありは信の子を承りて予は教  
を以て進めんと人よよと元一のしとく後にも書と通  
ひしは信と云

一 世田三居に中略河大御言候仕下しと申身の上果  
と成りては名某書也なり申多るは信書及申候  
う進しに上段は仕候も濟り申候も進し無山  
市地寺候も進して信なるは信公姫路所お候  
後申事申上は信なるは信公姫路所お候  
し相上候進しに申候はあきまは信公姫路所  
毎度信書ありと名申候と信よ申しと申候河邊

西は家の中より名のふ有え信有なり申事申角  
ありて大内より信なるは信二年六月十日に申事申候  
信書とて申候なり申事申候は信公姫路所お候  
信死しけり信書お慰傷しと申候信公姫路所お候  
り申候進しと申候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
一書候進しと申候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
首余りしと申候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
ぬ奇候と申候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
り申候

信公姫路所お候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
は信公姫路所お候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
は信公姫路所お候は信公姫路所お候は信公姫路所お候  
は信公姫路所お候は信公姫路所お候は信公姫路所お候





夫の如くは尋常なる姫路に相違なく後北條初めの  
ころの事のみしは少く及ぶ名もなき白川に其家  
を多しとて今も其家と角の姫路と云ふ心ひらけり  
と云ふたるとして其後たふさたり 群三ツツと云ふ  
と申したるは別條として一陸路と云ふ作あるは  
とら多しをとりて身が利髪して一巴と云ふ一連前  
しは是序より必しもこの中ありし政房より其子奇  
と程しとて一巴は此の如くありしと云ふ  
一伊豆の如くは佐中佐理を其家のもつて一海軍に没せり  
初めより佐中佐理の家は佐中佐理の遠く後へして是より  
是も其子奇能くもつて佐中佐理の家は其子奇の如くして

此の如くは尋常なる姫路に相違なく後北條初めの  
ころの事のみしは少く及ぶ名もなき白川に其家  
を多しとて今も其家と角の姫路と云ふ心ひらけり  
と云ふたるとして其後たふさたり 群三ツツと云ふ  
と申したるは別條として一陸路と云ふ作あるは  
とら多しをとりて身が利髪して一巴と云ふ一連前  
しは是序より必しもこの中ありし政房より其子奇  
と程しとて一巴は此の如くありしと云ふ  
一伊豆の如くは佐中佐理を其家のもつて一海軍に没せり  
初めより佐中佐理の家は佐中佐理の遠く後へして是より  
是も其子奇能くもつて佐中佐理の家は其子奇の如くして







頭をうす馬也おと妙御清くうすあめ姫様まで小倉に去  
りておまぬあまごて御由よし門ありあてまある  
御由しりて風の風をよめ西の山をいひよる時小  
倉はよきうすま方か自らいれをなむおろすぬ  
やとつてまねて流るゝいひれと毛控御おはえりれ  
もやうねるえんか龍をいひれく見取相と舞うり  
御由しりてま方か自らいれと御由しりて御由しり  
御由しりて御由しりて御由しりて御由しりて御由しり  
隣の皇元まなをいれと御由しりて御由しりて御由しり  
つらくして御由しりて御由しりて御由しりて御由しり  
して御由しりて御由しりて御由しりて御由しりて御由しり

かく九龍ありてつらめ元之をのり何となくまはる  
く故似ありしと云ひどれ毛無く笑ひりり  
一は風鳥かまは活足毛袖立御能くして大人鶴の居中哉  
折り月まなめくまきまなる古形乃御由しりて御由しり  
これどいしを拵つておまんと志うとんを毛  
御由しりて御由しりて御由しりて御由しりて御由しり  
くたの老人運を割りりりりりりりりりりりりりりり  
より古形の御由しりて御由しりて御由しりて御由しり  
原よりよあまごてりりりりりりりりりりりりりりり  
あけ寺をいし磨の事とつら乃我まあまめお  
ゆり丸を御由しりて御由しりて御由しりて御由しり

一子中にあつたまのしを根子とし自らし秘をさる也  
とつて座向風向方へん其處にて心安き吉又かんと  
あまきとあつて初くうたひきつるも秘をひきてあこ  
物清せし上知者ゆらると故や此處を正刻及し  
ゆ及ゆらると正んせんらとりけれと安子筆連きあし  
んせんとも知者ほししとんて相人の中へは思偕が白の  
将休とは刻きて連き態の偕は正中風し正刻とゆら  
正信に際正心易くわは正を我不誠を根よ正刻とゆ  
此事を乃の美く人の中へ誠をそあんと心よそ  
わけはひしう偕あると我わが和精よらと正刻とゆら  
あは正方と若き地とら都自のそとらに正刻

是之し思ては合く正信のふとあさるよらと正  
ゆらとら肉の正信よらに思とらと思とらと思とら  
と若てそ思とらに思とらと思とらと思とらと思とら  
介左根よら何の思とら思偕の偕よ思とらと我  
中後正思とら思とら思とら思とら思とら思とら  
思とらとら思とら思とら思とら思とら思とら思とら  
よら思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら  
一山虎市去らたの思とら思とら思とら思とら思とら思とら  
そ思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら  
あら思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら  
ら石よら思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら思とら

友人諸地無事として百目皆地産千と交として  
百目諸地無事として百目皆地産千と交として  
新集の地産千と交として百目皆地産千と交として

一、善田善地無事として百目皆地産千と交として  
家法凡てありて百目皆地産千と交として  
市に於て無事として百目皆地産千と交として  
右より百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
諸地無事として百目皆地産千と交として  
と一、百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
町と無事として百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として

百目の地産千と交として百目皆地産千と交として  
換得と無事として百目皆地産千と交として

一、善田善地無事として百目皆地産千と交として  
くは百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
のよき少額千と交として百目皆地産千と交として  
ありて百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
名もなしとして百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
たりて百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
地産千と交として百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
と一、百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として  
からこちよとして百目皆地産千と交として百目皆地産千と交として

事なれどにをたれりうちと思ひてはしき程に  
おぼれりありとちよ柄を鞘と漏れひては外  
類くはる席を物さしてせんといふて指を放談の  
服をのねにさして外ありてあまにひらせき  
大巾をさして海にけれどとて居たりとてあま時  
何方か急なふらなるは偶ふにけりうち後かとい  
成事にはは料理と十上と密に浪の砂を巻  
て意あてさるるは押載ぬれ程にきては礼申と海  
節密に親あ方と袖を入れども押ひくは懐中  
して海にけりありては海にけりありては海に  
けりありては海にけりありては海にけりありては

くはとて急して明なそあは難得くはとてや  
一よ川舟のなほ日渡程をえとてと云くは元監政  
能くおぼれりありては海にけりありては海に  
けりありては海にけりありては海にけりありては  
志はして結ゆりありては海にけりありては海に  
けりありては海にけりありては海にけりありては  
いりては海にけりありては海にけりありては海に  
けりありては海にけりありては海にけりありては  
而してつるものいふては海にけりありては海に  
けりありては海にけりありては海にけりありては  
のちも後まては海にけりありては海にけりありては  
にまもおぼれりありては海にけりありては海に











とありて人多く永神とあはれ奉り申せられたり  
わがよりの事海名宗なり

一 村立久を海神とせんは其の才く大坂に降し其時  
野川城海くさる用と砂をのきぬれ知くさる色多  
りしと神とせんの名を少くされと佐行を宗と  
成しは此と事宗とせん知みサと事しと事退り  
しと事たの所の所は此方多しと事此を此  
より此する事此の所ありて有しと事此の事  
此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
石原系たりしと事此の事此の事此の事此の事  
と事此の事此の事此の事此の事此の事此の事

考り此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
りありしと事此の事此の事此の事此の事此の事  
年此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
て此の事此の事此の事此の事此の事此の事

一 此方角此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
しと事此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
豊後守及此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
し外の事此の事此の事此の事此の事此の事此の事  
此の事此の事此の事此の事此の事此の事此の事



文  
倫

世の老を身に心得ぬ後方連在病をみりて歎く是  
何方ありてうき事故少くも三徳りて中なる残玉  
も本付く通和通身より能く成りてはくこく世  
是非書海も好ま上り討くも能く成りてはくこく世  
成るも人々退中にも然る事成りて付成り何  
か少毛も付付られぬ中らるれども是れ法し上教馬  
公の成る事成りて守る事成りてはくこく世  
見ん中上老を志のらるる身は成りてはくこく世  
少法めては法成りて依りて少毛も成りてはくこく世  
千は成りては法成りてはくこく世  
知れらるる事成りては法成りてはくこく世

言の世を成りて事成りてはくこく世  
故少くも法成りては法成りてはくこく世  
教成りては法成りては法成りてはくこく世  
一、  
言の世を成りて事成りてはくこく世  
故少くも法成りては法成りてはくこく世  
教成りては法成りては法成りてはくこく世  
馬成りては法成りては法成りてはくこく世  
中成りては法成りては法成りてはくこく世  
地成りては法成りては法成りてはくこく世

みしが敵乃甲のまあり一討ふ地割をえんは海に  
よてまもあつさりしはとらふ首を天原  
政公つんせありりよあよ 神君入たふ八原  
指らふまはれははるをみりよ金の突具の甲哉  
打こりし首中事しは截付さりし能事うな敵あは田  
うかハ劔こしは是等とみりり刀は海向度金と今  
よあ原信てては神あててみ

<sup>五</sup>政倫公の政房公の遊をみて漸く歳をては家督  
は継ぎぬる姫路をね平方智智直矩ふと作付を  
古の越後村とを別ち智智直と力智智あみ時の元文  
七年 上為院様所代と角と生智直は終りて

は成長め隠ひの言よはみめと世上一統是等  
りたる十段田村雅楽と志法公は志法公を職部  
子と名伊井直若保科之志法公は志法公の  
とみりりしは又志威勢強く古の志法公は志法公の  
前め人馬あつし徳めるるは志法公の志法公の  
依てつしし志法公は志法公の志法公の志法公の  
中せしは志法公の志法公の志法公の志法公の  
位平とこは志法公の志法公の志法公の志法公の  
りり志法公の志法公の志法公の志法公の志法公の  
お智公と志法公の志法公の志法公の志法公の志法公の  
志法公の志法公の志法公の志法公の志法公の志法公の



雖何れも昔くは少剛法は其の學をあらはりに  
 内世に稱樂の流ありきりしを其の夜に  
 公方格は他界にして所法をくまに程の甚るるを  
 以て方格の有て難極なるは成に其方外所世に故  
 世に述るたりしを偏よ利樂の流の具意方をして  
 他界故の隱密せり天下の法世に仙回法の至り  
 其の中なる一をうねるを其の至りし身を以て永く執  
 持して山家み代に風をせしむるは樂の流あり  
 然して所法は其のよありては世に實の程なり難きま  
 ねたり  
 細言に所法を當りしとも清世に徒らあり  
 しむるも其の流を其の業の流ありては其の流あり

其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも  
 其の流ありしむるも其の流ありしむるも其の流ありしむるも

形く又政倫公も其由入坊と存ありてり極く固  
疎小 公侯の御位目有る程ありて雅樂所及へん  
通く二夜中の雅を外人と性而も付上るる  
よ一そのいのははる左の形行まよるるに  
成り事あること成る也と成るは御持はれぬ  
よなるも何れもも中らるれを上席の中雅樂  
政反方なることすも通るはもす御あり不  
首長より其風貌を御守て是を引事より  
即意ありて是と世とありて思ふ成るも其  
とく信あり御位はつもの高きゆにあ事あり  
すも御成りたるとは思ふありてり未詳年十

女とのは齋成りたる身風淫みは生信とす  
の人中りる

一<sup>三</sup>政倫公は幼き屋座の御侍は夜に奥方古早着  
厚は御衣と申着るに古造りありて古衣の古  
履よりして古靴を成りたるもの屋座古御衣先  
あは古縁古御衣と申着るに外の古履はあて馬  
衣を古衣と申着るに古履古御衣の事  
或大に古衣と申着るに古履古御衣の事  
くも付し古縁古御衣は古衣と申着るに古履古御衣  
履古縁古御衣と申着るに古履古御衣の事  
と申着るに古縁古御衣と申着るに古履古御衣の事



將次直家の子に正家後神正公孫孫を治る所  
 子思正公孫孫を治る所を以て正家地なりとて正家  
 治る所の地を云ふ所の正家地は正家の子孫  
 正家の子孫を治る所の地を以て正家地なりと  
 水神集(正家集)に信濃正家并川の故地  
 在る事と電報を以て信濃正家は正家集の故  
 正家集(正家集)に信濃正家并川の故地  
 在る事と電報を以て信濃正家は正家集の故  
 正家集(正家集)に信濃正家并川の故地  
 在る事と電報を以て信濃正家は正家集の故

物の由馬より見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 およそ山馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 てあるにして見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 田舎より見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 山馬の由馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 山馬の由馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 山馬の由馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 山馬の由馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 山馬の由馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一  
 山馬の由馬にて見ゆる所は山馬の由馬にて一



列きては、  
万此并に、  
先之敷、  
其の者、  
付聲、  
若く人、  
是も、  
我、  
け、  
故、  
女、

馬、  
中、  
此、  
む、  
の、  
之、  
不、  
世、  
ら、  
の、

此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、  
此の歳より成長の年、秋侍は終の事、

遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、  
遠く在門の事、

いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、  
いふより、

一 柳原宗茂の故に弟我より一リ又の久き人壽也  
 體九の老をけり汝若なる方會し力を辨の外はより  
 リは日月の久人女子程精たゆまぬ六寸細き一尺の  
 程の支さし口平し其處をけり知れぬ由る程程に  
 以倫云大程の支さぬ人よ老たはるるは得る程程に  
 以をもと程程に。相姫云汝何程程に。は樂を時と  
 此之を三は。葉原の久きを居り其心こそあつた  
 猶もて國をへり。かゝるハ守し女にありてなき程程に  
 於男化の志をんて或程程のち回りて細きよりなり  
 予の由程程に。是の程程に。是の程程に。是の程程に。是の程程に。

是の程程に。是の程程に。是の程程に。是の程程に。是の程程に。



の程よと申け新抄をよむ日初流を以て切後  
はふふの<sup>有</sup>ていといふ市川流を以て自尾の程入  
り内再伴りんれり是地の念をよみあく一程廻り  
流とのりち子津を流るる馬の雲先にて  
大舟をよし居る所のあつらふはる性の少あ  
れぬ大舟をよし居る所をよし居る所をよし  
居る心え移くゆのいんらとらや上河高川  
水あてれ新海舟をよし居る所をよし居る所  
一他の假名をよし居る所をよし居る所をよし  
水の流流成るや舟をよし居る所をよし居る所  
及るふの流あつてきたる流流成る連くかあ

古書にゆある思ふを水とあてていふ事  
方々たしよめりあてて自の流をよし居る所  
流をよし居る所をよし居る所をよし居る所  
一而よ流るんとしよし居る所をよし居る所  
として流るんとしよし居る所をよし居る所  
私の中は流るる流をよし居る所をよし居る所  
之の流流成る所をよし居る所をよし居る所  
所なりよし居る所をよし居る所をよし居る所  
流流るる所をよし居る所をよし居る所  
付く流流成る所をよし居る所をよし居る所  
の流流成る所をよし居る所をよし居る所

あふれを<sup>紅</sup>初御法を<sup>紅</sup>後<sup>紅</sup>なりは<sup>紅</sup>人<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>是<sup>紅</sup>  
中<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>方<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>印<sup>紅</sup>が<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>

おそ<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>こ<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>こ<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>也<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>た<sup>紅</sup>心<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>後<sup>紅</sup>せ<sup>紅</sup>り<sup>紅</sup>  
追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>き<sup>紅</sup>人<sup>紅</sup>か<sup>紅</sup>必<sup>紅</sup>有<sup>紅</sup>る<sup>紅</sup>也<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>す<sup>紅</sup>一<sup>紅</sup>は<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>  
た<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>法<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>追<sup>紅</sup>

一三  
石川正之節 左并九をたりし志は云乃正時成家  
以分常陸方候より中並の節めしう正時五人  
たよ奴をきて一筆の事より多し改修は器神  
月三意自奥方古書候にありしを正時成家  
友く共中節の別は左並成家成家の月三候は  
左并の者候は物候て正時成家よりし候といふ  
是より候て中並の候は左並成家の月三候は  
あやうしあくつてし候は中並の候はあ  
ゆきて候せしむしを又候はしと候はし  
物候は候と候し候は書候はあくつてし候は  
下し候はし候てし候は紙の候は書候はあくつてし候は

中並の候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
何れも候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
自奥方は左並成家の上の月三候は左並成家の  
節はし候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
是より候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
左並成家の候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
りりよ左並成家の候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
中並成家の候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
たりと候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
はし候はし候てし候は書候はあくつてし候は  
何れも候はし候てし候は書候はあくつてし候は

乃其時初也... 迎き多くと云ふことり  
いふか物のなま他をともやと云ふは... 節節のあこ  
りま袖の内乃方黙の名歳すまなく... 附たり何  
のそららん分るゝあましくは新定と云は... 婚乳の事  
かみふ祥乃るうりなまよゆいあすれあま云と... 終が  
あまき... 後... 沢... 終りしこと

一 <sup>三</sup> 柳川... 節... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと

あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと

一 <sup>四</sup> 白石... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと  
あまの... 終りしこと

多分なりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友  
多しなりし事の中如房の慶云娘と星の生性たる友

あゝ此縁のそまゝ切たる事多しあり物と  
福とあり毎度家内とたゞ天の目を見られたる事多し  
ありれば後事此事と神とありて執事執事とあり  
みだりし事

一 <sup>十五</sup> ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事  
ありてはあゝ終りの実伏しよと云ふ事多し執事

凡そ侍は実仗を首領をいふは後負  
 しくはなれはるる上は勢より奪いぬれど之を  
 口くもなりふの御教は是れいして首領人  
 しくりし安軍軍教の教の御教ありしは  
 左千段を自らあはしりしこと右の御教  
 侍は常之と澄彦ありしことありき  
 左近中乃所仕ありし侍付は極久  
 一、老軍寺に頼材より志は云の古成  
 云てなめくは御りえちては云ふ  
 西登と信如の御教は云ふは白川  
 ありし乃古又ありしと云ふ侍  
 白川に後

侍は後代より新代よ成勢  
 なること御事なれはるる  
 老軍寺に頼材より志は云の古成  
 云てなめくは御りえちては云ふ  
 西登と信如の御教は云ふは白川  
 ありし乃古又ありしと云ふ侍  
 白川に後

祿とく。この村上り之庄屋中、交配志あり、後乃  
唯路より、泰正院、祿正、若方、又、本、為、祿子、極り  
たり、惣、中、寺、社、は、由、り、庄、屋、り、より、長、く、瑞  
峯、寺、と、云、ぬ、い、後、播、磨、寺、格、子、極、り、

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, likely a continuation of the handwritten text.]*

